

## プロローグ

ロンドン塔、ホワイト・タワーの胸壁に、人影があった。

わずかに白みはじめた東の空を背に、北西の方角を遠望している。ロンドンの中心、シティと呼ばれる区画だ。

夜明け前の古都は、いまだ眠りの中にある。石造りの街並みが濃い霧に埋もれる様は、まるで古に水没した幻の都のようだ。霧の中に灯るガス灯の明かりが、息を潜めてゆらゆらと揺らめいていた。

「……悪くない」

冷たく微笑みながらつぶやいたときだ。

背後から荒々しい靴音が近付いて来た。

「探したぞ。こんなところに、どうやって入り込んだ」

現れたのは無骨な印象の若い男だった。

巨漢だが、引き締まった体軀は、愚鈍さの欠片もない。こちらを見据える眼光は鋭く、また、自分より明らかに小柄な相手と対峙しながら、油断する様子がなかった。

「俺が誰だかわかるか？」

問いかける男に、人影は肩を竦めて見せた。

「昨日の店の用心棒」

「なら、要件もわかるな」

男はあえて見せつけるように、拳を握り締め、手のひらに叩き付けた。鋭い打撃音が跳ねる。

威嚇としては十分な迫力だ。

「お前は勝ち過ぎた。少なくとも、一見の客が勝つていい金額ではなかった」

「公正なゲームの結果だよ？」

「だとしても、順当な新顔のやり口ではなかった」

「ほう？」

そう言い返されるとは思っていなかったのか、人影は少しおかしそうな声を出した。対する

男は、あくまで無表情だ。

「金さえ戻れば、手は出さない。大人しく従え」

「良いかね？」

「何がだ」

「昨日の彼、店のオーナーだろう。ずいぶんと血圧が上がったように見えた。察するに、『痛めつけろ』ってオーダーでは？」

人影の台詞に、男は苦い顔をする。

「それがわかってたなら、少しはやり方を考えろ。お前、長生きできないぞ」

「ハハ。それはどうか？」

人影は愉快そうに笑うと、改めて目の前の男を、頭の上から爪先まで観察した。

「……ふむ。軍人崩れか。腕は立ちそうだが、あの程度の店で燻っているとは気の毒なことだ。とはいえ、結核を患った母親を養っている、雀の涙の傷痍年金では足りないのも無理はない」

男が目を見開いた。

「なぜ知っている？」

問いかける声に、隠しきれない驚愕が滲んでいる。

対する人影は平然と告げる。

「そのコートは軍の支給品で、身体に馴染んだ具合からしても古着ではなく君の私物だろう。また、ここに来るときの足音を聞く限り右足に障害があるが、筋肉の付き方からして生来のものではない。

察するに、恵まれた体格を活かすべく軍に入隊したはいいが、怪我を負って除隊、ということころではないかね？　そしてその右足だが、トラウザーズの膝に繕いの跡がある。

メイドを雇う余裕はなからうし、針仕事に精を出すタイプにも見えない。結婚指輪もなし。

なら恋人が？　いやいや、ステッチに添えた刺繍が古い流行だ。順当に考えて母親の仕事と見るべきだが、ただ、年配の女性にしては運針に難がある。何度も中断しながら繕っている。その理由を探すと目に付くのが、コートのポケットに突っ込んだ、瘴気避<sup>マイクス</sup>けのベールだ。

裾が少し見えてるが、その模様は独特だからすぐにわかる。天然痘に効くとの触れ込みでパリなどで出回っていたけど、最近は結核患者にも評判だそうだね？　生憎インキキだよ。アヘンチンキよりはマシかもしれないが、同じ金額を使って清潔な生活環境を整えた方がずっと効果的だ」

つらつらと紡がれた言葉の圧に、男は気押されて、口を閉ざす。

一方、人影は楽しげに頷いた。

その長い髪を微風になびかせ、

「しかし、君はなかなか面白いな。何より、有望だ。ちょうど手頃なルームシェアの相手を探していたところだし、君に頼もうか」

「な、何を言っている？」

「何をもって、いま言った通りさ。代わりに、君の秘めた願望を叶える手助けをしてやろう。そう。君のその『自分の力を存分に振りたい』という手助けをね」

そう告げると、人影はゆっくりと男に向かって手を差し伸べた。

男が身体を強張らせる。しかし、逃げることもできず、マジマジと人影を見つめる。

「記念すべき新天地ロンドンでの最初の一人だ。受け取れ、我が《ギアス》を！」  
人影の瞳が、怪しい光を放つ。

東の空に昇る太陽が、雲の隙間から最初の光を地上に投げた。

\*

「……あんたは、いったい……」

震える声で、男が問うた。

人影はゆるりと笑い、男の問いに答える。

どこからかカラスの鳴き声が聞こえた。

「我が名は、モリアーティ。《教授プロフェッサー》と呼ぶがいい」

\*

それから、十年の時が過ぎた。